

第2回・市史編さん・編集合同委員会が終了！

本年度の市史編さん事業の進捗状況とその課題の洗い出し、来年度の編さん計画の概要の確認を行いました。当日は、監修・宅間一之編さん委員が欠席となりましたが、市長・副市長・教育長の3名の編さん委員、10名の編集委員と委託業者・株式会社ぎょうせい四国支社藤山営業課長代理、事務局の田村生涯学習課長・由岐係長・吉本係員が出席し、1年間の事業総括を行いました。また、県史編さんにあたり高知県文化振興課山崎昌宏課長補佐と南太郎チーフが視察のため本会議を傍聴しました。以下会議の概要を(1)～(3)にまとめましたのでご確認ください。

(1) 実践報告(市史編集委員会・松田直則委員)

本年度、市史中世山城調査が進み、松田委員と尾崎調査協力員のコンビで16城跡の調査を終えました。令和元年度以前に調査した3城跡を含め、合計19城跡の調査が完了したことになります。清水城跡は明治末から大正期にかけての市街地造成で破壊されている可能性が高く、残された城跡は加久見地区の宝山城跡のみとなりました。この中世城跡は、足摺半島を除く、市域に広く分布しており、歴史素材・観光資源としても有効でジオパーク活動にも活用していくことも可能です。

(2) 事業の1年間の総括と来年度事業の流れ(市史編さん室・田村公利)

①一次原稿(章全記述)の提出について

各章別の1次原稿執筆率を示し、今年7月を目途に1次原稿を市史編さん室に提出していただくこと、提出の際には担当する章を完了してから提出することなどが確認されました。

②『新土佐清水市史』人権(同和)記述方針(案)の提案

記述方針(案)を全員で確認して意見を出し合った。その中で記述方針の3つの項目にもう一つプラスし、4つの項目とすることを確認した。

(3) 市史編集研修会での確認事項

文中の図表について、各節単位に参考文献と註が節末に記述されるので、図表・写真・資料などの番号は下記のように標記されることになりましたので、よろしく願います。

図・写真⇒下部に「図1」「写真1」のように記述。

表・資料⇒上部に「表1」「資料1」のように記述。

節ごとに参考・引用文献と註を節末に付ける。

◎「中央公民館歴史講座と中世山城調査(三ツ山城跡・家路川城跡)」

市史編集委員松田直則氏に3日間にわたり実践報告・講演・調査活動にご尽力いただく。

松田直則編集委員には、2月5日「市史編さん・編集合同委員会での市内中世山城調査についての実践報告」、翌6日「中央公民館“身近な地域の歴史講座”の山城基礎講座と現地見学の講師」、7日に「大岐地区三ツ山城跡と市野瀬地区成川の家路川城跡の調査」と3日間にわたり精力的に本市史編さん事業の普及啓発や公民館活動にご尽力いただきました。ありがとうございました。

2月6日「歴史講座」には、高知新聞土佐清水支局長・山崎彩加記者に同行取材していただき、翌日7日の高知新聞朝刊記事に掲載していただきました。



↑三ツ山城跡の堀切



↑家路川城跡の堀切

なお、土佐清水市郷土史同好会の武藤会長・東近顧問・西田事務局長、大岐地区の江口さん、大岐地区出身の佐野さん、市野瀬地区沖上区長など6名の方々にボランティアで調査にご協力いただきました。重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。



【清水】土佐清水市に残る中世の山城跡に関する学習会が6日、

土佐清水の山城学ぶ

20人 現地で遺構確認も

同市天神町の中央公民館や現地で開かれ、市民ら20人が地域の歴史に理解を深めた。同市では2022年度の新市史刊行に向け、編集委員を務める松田直則・県立埋蔵文化財センター所長(64)が約20ある山城を調査中。成果の中間報告をしてもらおうと、同公民館が学習会を主催した。

松田さんは講演で、縄張り図を示しながら城の構造を解説。大岐、布、市野々などの各城を例に、本丸に当たる詰の土塁が半周しかないなど、同市の山城の特徴を紹介した。また引地山城や長野城は、下ノ加江川の船や人の往來を見張れる立地にあると説明した。

現地学習は大岐にある二つの城跡で行い、本奈路城では堀切や塹壕、土塁などの防衛遺構を確認。大岐城では高く築かれた土塁や広い詰に、参加者から「すごい」の声が漏れた。2城は隣接しており、松田さんは「主郭級の中心部を二つ持つ連結型の城ではないか」と推測。参加者は攻守両方の立場から遺構の役割などを考えた。

同市浦尻の佐野舞さん(32)は「地元だが本奈路城の存在は知らなかった。地元の歴史に興味を湧かせたし、先祖のことを調べてみたい」と話していた。

(山崎彩加)

令和3年2月7日付け高知新聞朝刊記事より引用

叶崎を訪れた文人たち その1

当時の東京高輪町に生まれた大正～昭和初期にかけての歌人・脚本家・小説家である。石川啄木・北原白秋らと競い、『明星』廃刊後、『スバル』で活躍した。「命、短かし、恋せよ乙女～♪」で有名な「コンドラの唄」の作詞者といえればお分かりだろうか。

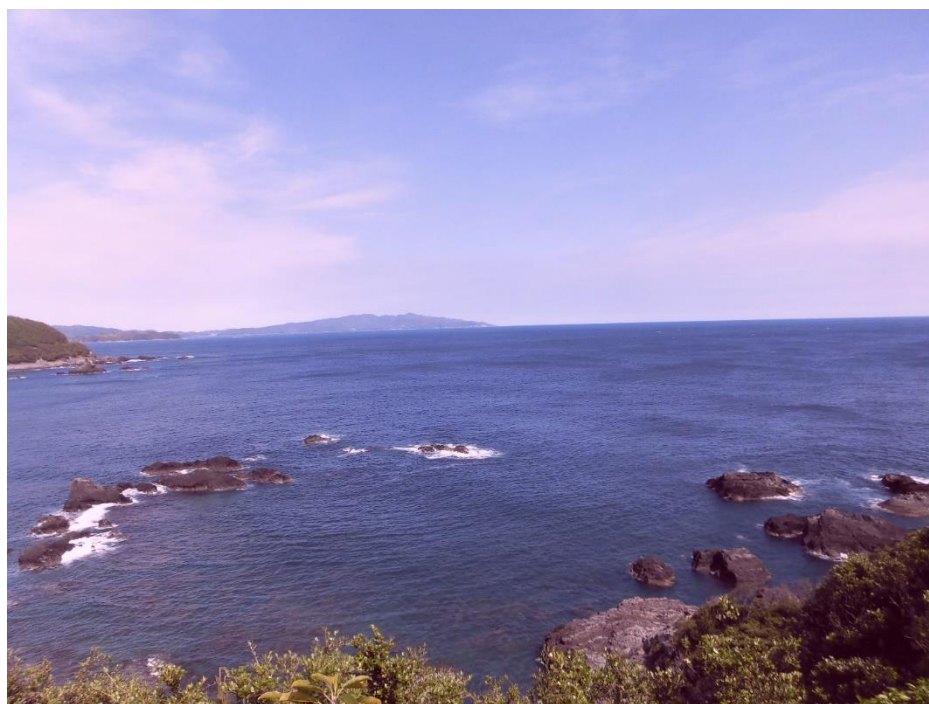
彼は、昭和8年9月5～12日に加茂川丸に乗船して浦戸を出港、足摺岬～竜串～叶崎～沖ノ島を旅した。この時に叶崎で詠んだ歌が、

土佐ふみに まづるすらく

この日われ うれしきかもよ 叶崎見つ

その後、昭和9～12年まで高知県香美郡在所村猪野々に隠棲。川に面した断崖の上に「溪鬼荘」と名づけた小さな庵を建てて生活した。ここでの生活は「傷ついた心を慰めるとともに人間修行の場となり、不遇時代のさすらいの身から、再び起き上がることができた」と綴っている。東京での生活に疲れ、全国行脚していた傷心の勇を支え、再び中央に送り出したのは、土佐の風土と人情だったに違いない。

正面にうっすらと見える陸塊は足摺半島であり、その右端が臼箸である。明治8年から大正期にかけて、この海域ではサンゴ漁が盛んであった。室戸の赤サンゴに対して、足摺岬から月灘沖にかけての海域では、上質の桃色サンゴが取れることで知られた。明治7



叶崎から見た足摺半島西部 (撮影・田村公利)

年に高知市朝倉町（現在の高知市南はりまや町）のサンゴ商・福島喜三郎が貝ノ川の漁師・中平由良平と契約を結び、この地でサンゴ漁が開始したと伝えられる（亀井釣月著・沖本樵稚児補註『補註幡南探古録』土佐清水市史刊行会、1966年）。

—編集後記—

サークル文化展の土佐清水市郷土史同好会の「旧大津小学校展」では、叶崎を訪れた文人たちについて触れた企画展示があります。是非、ご来館ください。

2/20～2/22(土～月)9:00～17:00、2/23(火)9:00～13:00